# 近世後期の往来物に見る地域性の反映について
## ―盛岡藩領見前村の字尽『所童早合点』を例に―

米谷隆史

### 一　はじめに

出版書肆によって多数の消息文例集や字尽といった往来物の刊行が盛んに行われた近世期にあっても、写本の初学書は各地で編集されて学習の場で用いられていた。書簡文の体裁を採って地名や故事を本文に盛り込む地理類の往来物だけでなく、意義分類体やイロハ分類体の字尽も規模の大小こそあれ各地に伝存が確認される。中には秋田県角館の『烏帽子於也』のように早くから地域史研究上の意義が見出されて活字による翻刻が備わるものも存する。(注1)『烏帽子於也』に限らず、管見の東北の字尽諸本の多くには何らかのかたちで地域性の反映が見られる。その様相は一本ごとに異なっているが、各々に地域の文字学習や編纂者自身の言語把握のあり方を今に伝えるもので、口頭語の方言史研究に資するにとどまらぬ意義を有するものと考えられる。中でも盛岡藩領見前村（現在の盛岡市南部）の手習師匠 星川里夕が文政年間に編纂したと見られる『所童早合点』は、里夕の手になる他の複数の著作が伝わっており、それらとの関係から里夕の学識や所収内容を検討できるという点で興味深い事例を提供してくれる。本稿では、同書の構成と所収内容、及び、反映した地域性の諸相を述べ、その上で、辞書史上の位置づけと近世後期の東北における方言認識の一端につい

て考察を行うこととする。

なお、調査対象とする文献は近世のものであるため、現代社会では使用すべきでない語の掲載が見られる。本稿中でもそれらの引用を行う部分があるが、史的資料の分析を目的とするものであって、差別意識を助長する意図はないことを明言しておく。

## 二『所童早合点』の編者星川里夕

『所童早合点』は、現在のところ岩手県立図書館蔵の一本が知られるのみである。同書に関する唯一のまとまった紹介である太田（一九五一）には次のように見える。

所童早合点
字画・地名・検地・物成・交通・飲食・虫魚等四十九項に類別している。百余葉、記名にないが星川里夕の撰と云われる。里夕は我儘翁、また独笑と号し、狂歌、狂文をよくし数書の著述がある。見前村寺小屋師匠、生涯娶らず、また画をよくした。故宮崎道郎氏に蔵した。

字尽部分に対する解説はごく簡略で、むしろ編纂者と推定する星川里夕に関する言及が過半を占めている。ここでも触れられている里夕の事績は『所童早合点』の検討に深く関係することから、字尽本文の検討に入る前に、まずはこの点を確認していくことにしよう。都南村誌編集委員会（一九七四）は、近世の見前地区の家塾の師匠に言及する中で、「三本柳では森与吉・星川三柳亭が弘化初年頃から家塾を開いていた。三柳亭は自分を「我儘翁」とも称して村の子ども達に手習を教えていたというが、くわしい記録はない。ただ、彼が残した洒落文に依って当時のくらしを偲ぶに過ぎない」として、『我儘翁自叙狂文』（後述の文献ニ）の冒頭より「我生れながらにして愚頓なれば、都人に交ること恥かしく、親よりゆずりを得たる天神堂と四つ足の四徳…中略…片田舎なる三本柳村へ参り…中略…治まれる君が代の弓や案山子に持たせ鉄砲にて湯をわかし、具足櫃へは雑穀を入れ、甲砂鉢にて秋餅のナマス（鱠）をあへ陣扇は炬燵に用ゆ…中略…閑居して、春の月のいとおもしろく山の端にさし移る景色、こし方の事を思いよりて、しばしの間眠りける。」との文章を引用する（六八二頁。中略は稿者による）。

狂文中の記述とはいえ「弓」「鉄砲」「具足櫃」が用をなさぬ体を記す様からは、里夕の出自が武家であることを思わせる。また、親ゆずりの四足の五徳は、自身の姿に重ねられて、里夕の著作中に再三現れる。いずれ、相応の学問を身につけた者が、心身の十全ならざる持ち前から見前村三本柳に閑居したということであろう。

一ノ倉（一九八四）の「盛岡藩著作目録」等によると里夕の編著とされているものには、『所童早合点』の他に次の七点がある。イ・ハ・ニはもりおか歴史文化館、ロ・ホ・ヘ・トは岩手県立図書館の所蔵である。順次、概略を説明する。書名は巻首題を採り、巻首題がない場合は扉題や外題を以て替える。また、割書は〈〉内に記し、改行位置を示したほうがわかりやすいと判断した場合は／を以てした。理解が至らず解読できない文字は■で示している。

**イ『〈深川／若松〉道行所屋しき名』合一冊**

内題下に、「やしき所の名」を朱枠で囲む旨が記されてすぐに本文が始まる。「恋ゆへに身をやつせとも…中略…二人連いつれ菖蒲田かきつばた…」のように掛詞的に地名を織り込む典型的な男女二人の道行文で、末に「文政五年午正月出板」とあり、この記載の下に「浄瑠璃／竹本万太夫／三味線／鶴沢五郎／不坍坊／作者 独笑［朱図］」とある。［朱図］は四本足の五徳が裏返った図案で、後述ハ・ニにも使用が見える。刊記らしき記載があるが、版本の存在は確認できない。文政五年1822以前の成立とみられ、確認できる里夕の著作の中では最も古い。本書は合本で、前には『世俗の言葉の事』、後には『松前蝦夷唄文句』と『蝦夷言葉大略』が配される。これらは一括して転写、合冊されたもので、特に『世俗の言葉の事』と『蝦夷言葉大略』は各地の言葉への関心を示すものであることから、その親本が里夕の手沢本であったとすれば極めて興味深いが、残念ながらこの部分には奥書や識語が見えず、いずれも伝来は不明とせざるを得ない。蔵書印は『世俗の言葉の事』の巻首に「楓／園」。

**ロ『手習子供等制禁之事』一冊**

「一 人と生れて物を書さるは…」と始まる寺子屋の式目三十三箇条を記したもの。「文政七〈甲申〉年正月吉日／我儘翁／閑々齋里■」と「宮崎教山写之」の二つの奥書（同筆）がある。表紙貼付のラベルに「楓

園／叢書／第八八冊」。蔵書印は巻首に「楓／園」。

**ハ『三木柳村大沼の鮒の由来』合一冊**

「摂州」「池田」の「上酒」である「飲口五斗兵衛尉」の病の治療に三本柳村大沼の鮒が効験あらたかであった次第を述べ、「此鮒味ひ美にして酒の飲る事滝の流るゝか如し」のような能書等を記す狂文。能書部分の末に「鉄砲二年辛卯十一月弘所 三本柳村 我儘齋［朱図］」。「朱図」はイに使用のものと同じ。「鉄砲二年辛卯」は、天保二年 1831 辛卯のもじりであろう。本書も合本で、後に丁を改めて後述ニの本文が配される。蔵書印は巻首に「楓／園」。

**ニ『我儘翁自叙狂文』一冊**

都南村誌編集委員会（一九七四）が記すとおり、里夕の素性を窺いうる唯一の文献である。既に引用した我が身をかこつ内容の後には、四足の五徳の立場からなる狂文が続く。「…亦年中いろりを住家とすれば折ふし鼠の小便に身を穢ス又は猫の為に辺りを堀れ居処を乱しといへ共仁義礼智信の五ツの徳の美名あれば、泥中の蓮ならんか…あぐに交はり居るなればかならず心ゆるしなよ／あく仲間五徳は男たてなるか尻持をして人を助ん」のように類型的ではあるが、見立てもなめらかに堂に入った書きぶりといえよう。「天保八年酉ノ霜月　三柳亭 我儘翁」と「大正十五年六月　成田良次写之」の二つの奥書（同筆）がある。

**ホ『狂歌本処々ぬき書』一冊**

書名の左に「なかきよにこの書のうちを詠むれは／ねむたきめをもかすみさりけり」とある。本文冒頭の「春 餅つかずしめかざりせず松立ずかゝる家にも正月はきつ」以下、狂歌を抜き書きしたもの。末に「我儘翁 里夕［朱図］／あぐ仲間［朱図］は男伊達なるか／尻持をして人をたすけん」とある。［朱図］は先述のもの。表紙貼付のラベルに「雙鶴／叢書／第一四冊」。蔵書印は巻首に「楓／園」。

**ヘ『津志田滑稽集合部屋』写一冊（乾坤二巻）**

現在の盛岡市南部にあった津志田遊郭を舞台にした洒落本。寄多子古登 自序、坤巻の末に「文化九歳霜月／山ノ千里題／盛岡通紺屋丁／書林〈地本／問屋〉／橘屋重三郎 版」とある。「橘屋重三郎」は書肆としては名が知られず、版本の存在は確認できない。なお、他の七本とは異なり、書物中に里夕の著作とする徴証は見えず、一ノ倉氏の判断の根拠は今不明である。蔵書印は巻首に「楓／園」。会話文を多く含む洒落本で、

その言語的特徴が注目されるところだが、一読の限りでは明確な地域性は看取されない。

**ト『百物怪之事』写一冊**

「屋の棟に竹の生出て枯果ば国の替かうつろ破る、」のような予兆を記す和歌を百首記したもの。同筆の識語が「紫波郡見前村宮崎道郎氏所蔵本」と見返しに、「本書は盛岡市外見前村宮崎文庫の所蔵にして同地の寺小屋／師匠たりし星川我儘翁の著なり。氏は閑々齋里夕と号し／狂歌をよくし又幾多の著作を遺す」と後見返しにある。蔵書印は扉に「弍倉文庫」。

これらの著作からは、盛岡城下の生活を経て、やや南に下った見前村に退隠した地方教養人たる里夕の像が浮かぶ。また、ロの奥書に「文政七年」1824の年記が見えることから、先行研究の記す「弘化初年」頃よりも早く地域の教育に携わることがあったのかもしれない。

なお、右のうち書写年代が明確にわかるのは大正十五年の奥書を有するニのみであるが、料紙や墨色、字形等からみて、右の七本は全てが近代の転写本である。イ・ロ・ハ・ホ・ヘに存する蔵書印やラベルに見える「楓園（叢書）」「雙鶴叢書」は、いずれも岩手の郷土史の礎を築いた太田孝太郎氏の収集になる書物であることを示す。また、ロとトの識語に「宮崎教山写之」、「紫波郡見前村宮崎道郎氏所蔵本」と見える「宮崎」氏は見前村の宮崎求馬氏、道郎氏の父子二代のことで、いずれも神職の傍ら教員を務め、大正四年からは蔵書を私立図書館「宮崎文庫」として公開していた。(注3) こうした先人の地域の歴史と文化へのまなざしが、里夕自身についての詳しい記録はないとされながらも、その著作が今に知られる礎となっているのである。(注4)

## 三『所童早合点』の構成と所収内容

『所童早合点』について、書誌的な事項から順次確認していくことにする。写本一冊、二三・六×一六・四cm。薄茶色の後補表紙による装丁で、題簽に墨書で外題「所童早合点」が記される。全一二一丁、前に遊紙一丁を配することから墨付は一二〇丁（以下、丁数は墨付丁の数で示す）、毎半丁四行（目録、字尽本文とも）。1丁表に「所童早合点目録」として以下「一九々之次第　壱／一　編冠づくし　三」のように意義分類名とその所在を記す。この目録が7丁表の二行目まで、

その後に、地名や屋号の見出語が「壱厘塚」「酒屋質屋」「神仏」「寺」「番所」「湯屋」である場合に添加する符号の凡例、目録には記載が無い事項（後述）を配し、9丁裏一行目に巻首題「〇所童早合点（ところわらんへはやかつてん）」と続く。各分類内では、見出語の下に割書で注を加えることがあり、その中には五七五の発句や七七の下句が記されることがある。また、120丁表には「見前通三本柳村／藤澤重次郎／持主」（本文同筆）との識語がある。蔵書印は1丁表に太田孝太郎氏の「楓／園」。

本書の奥書や識語には編者を星川里夕と特定できるような記載はないが、後述のように、本書は盛岡藩領見前村の在住者を念頭に編纂されていることや、本文中に里夕の発句等が多数挿入されていることから、太田（一九五一）が「記名にないが星川里夕の撰と云われる」とするのも首肯されるところである。成立年は、116丁表の「芝居（しばゐ）」の注に「文政五年迄百四十五年」とあることから、その頃に編纂が進んでいたことが知られる。イの奥書が文政七年だったので、ちょうど同じ頃の編纂ということになる。

次に伝本上の位置づけを確認しておく。本書の料紙は近代のものと見られる。また、右に言及したロと本書は同質の料紙で寸法も全く同じである。筆写の書体もごく類似することから、本岩手県立図書館蔵本は、藤澤重次郎所持の原本ではなく、宮崎父子か太田孝太郎氏のもとでロと同時期に転写されたものと推測される。いずれのもとで転写されたかについての確証はないが、右に引用した太田（一九五一）が『所童早合点』について「故宮崎道郎氏に蔵した」と記しており、近代の転写本の入手を殊更にこのように記すとは考えがたいことから、現段階では、宮崎氏が藤澤所持の原本を入手所蔵しており、それを太田氏が転写して自身の叢書に加えたものと見ておく。なお、藤澤重次郎所持本が里夕筆の原本であったのか、その転写本であったのかも不明とせざるを得ず、『所童早合点』に関する検討は、現存本が里夕筆の原本から転写時の改変を蒙ったものであることを前提に進めることになる。

本書の意義分類の構成は次に掲げる表一の通りである。上段に目録上の、中段には本文に示される分類名を記し、下段には各分類の掲出が始まる丁数を示した。本文中には、目録上に記載がない内容を分類掲出している場合があるが、本文中に当該分類名が有る場合はそれを、無い場合は仮の項目名を〇内に記してある。

また、それ以外に分類の簡略な内容を（）内に示した箇所がある。最上欄は通し番号である。紙幅の関係で分類名に対する付訓は省いた。

目録が示す分類数は太田（一九五一）が記すように四九だが本文に従えば五八である。また、目録と本文とでは分類名称の小異以外に次の相違がある。

①目録冒頭の9「九九之次第」の前に、本文ではイロハや各国語の文字を掲出する部分が存する。

②26「東西南北之覚」は、本文中に分類名として明示されない（該当する方角関係の語群は存する）。また、48「魚之名之覚」は、本文中には分類名と相当する語群が存するが、目録には立項されていない。

②は形式上の齟齬であろうが、①は目録の作成後に1～8の内容が増補されたことを示していようか。語を見出語とする字尽的な収録内容ではないために目録への記載を省いたという見方もありうるが、それならば9「九九之次第」も省かれてしかるべきである。また、先に、内題は9丁裏の一行目に存すると述べたが、内題に続くのは2の内容である。1の（いろは仮名遣）と仮に称した部分は「い〈いふ／いう／ゆふ／ゆう〉ろ〈ろふ／ろう／らふ／らう〉」のような仮名文字列用法の例示で、平仮名のいろはと若干の変体仮名を示すのみの2より後に配されるのが妥当であることから、この冒頭部分は未整理な状態が残されているのであろう。

全体の構成を概観すると、1～10に代表されるような版本の節用集や往来物に存する内容と、見前村や盛岡藩領ならではの内容とが混在していることが見てとれる。分類名から後者の内容と直接知られるのは28から36辺りであるが、例えば11「田地高之覚」は「壱万五千三百四拾八石弐斗七升六合四勺五才」、12「金子ト銭之覚」は「金子弐千四百六拾九両三歩半切銭三万八千七百三拾五貫六百九拾壱文」が内容の全てであり、これらもまた地域の石高や収支に関わる数値なのであろう。(注5) 28「二郡之覚」は見前村が属する志和郡と近隣の岩手郡の村名、30「所村屋鋪之覚」は見前村内の集落（屋鋪）名が並ぶ。先述イの道行文には、「菖蒲田」以下全三七の地名が読み込まれているが、表記上の小異を無視すればうち三二がこの部の中に見られる。31「諸国之名付」はその見出語のみ引用すると「琉球 朝鮮 龍宮 長崎 大坂 京都 伊勢 関東 江戸 浅草観音 仙台 松島 塩竈 盛岡 宮古 鍬ケ崎 大槌

表一

| | 目録 | 本文 | 丁 |
|---|---|---|---|
| 1 | | （いろは仮名遣） | 8表 |
| 2 | | （平仮名いろは） | 9裏 |
| 3 | | （漢数字、一・二～億） | 10表 |
| 4 | | 片仮名（イロハ） | 10表 |
| 5 | | 字仮名（以呂波） | 11表 |
| 6 | | 朝鮮之国字 | 11裏 |
| 7 | | 阿蘭陀之国字 | 12表 |
| 8 | | 天竺之国字 | 12表 |
| 9 | 九九之次第 | 九九之次第 | 13表 |
| 10 | 編冠づくし | 編冠尽し | 14表 |
| 11 | 田地高之覚 | 田地高之覚 | 15裏 |
| 12 | 金子ト銭之覚 | 金子ト銭之覚 | 16表 |
| 13 | 穀物之覚 | 穀物之覚 | 16表 |
| 14 | 御物成歩付 | 御物成歩付 | 16裏 |
| 15 | 穀物拵之覚 | 穀拵之覚 | 17表 |
| 16 | 五穀之覚 | 五穀之覚 | 17裏 |
| 17 | 五色之覚 | 五色之覚 | 17裏 |
| 18 | 万役立之覚 | 万役立之覚 | 18表 |
| 19 | 手振之覚 | 手振之覚 | 18裏 |
| 20 | 御伝馬之覚 | 御伝馬之事 | 18裏 |
| 21 | 馬之毛色之覚 | 馬之毛色 | 19表 |
| 22 | 寸尺之覚 | 尺寸之覚 | 20表 |
| 23 | 御普請場之覚 | 御普請場之覚 | 20裏 |
| 24 | 名頭字尽し | 名之頭字尽 | 21裏 |
| 25 | 十乾十二支之覚 | 十乾之事／十二支之事 | 23裏 |
| 26 | 東西南北之覚 | 【項目名無】 | 24表 |
| 27 | 四季之覚 | 四季之覚 | 24表 |
| 28 | 二郡之覚 | 二郡之覚（志和・岩手郡） | 24裏 |
| 29 | 見前高之覚 | 見前高之覚 | 26裏 |
| 30 | 所村屋鋪名付 | 所村屋鋪之覚 | 27表 |
| 31 | 諸国之名付之覚 | 諸国之名付 | 29裏 |
| 32 | 所之道中記 | 所道中記 | 31表 |
| 33 | 盛岡町名付 | 盛岡町名付 | 38裏 |
| 34 | 同諸士丁名付 | 盛岡諸士丁 | 45表 |
| 35 | 盛岡船橋間数 | 盛岡船橋并升形ゟ間数 | 48表 |
| 36 | 同諸士名字いろは寄 | 盛岡諸士名字いろは寄 | 48裏 |
| 37 | 御役付之覚 | 御役付之事 | 59表 |
| 38 | 職人之名並商売物店名付 | 職人之名并商売物店之名付 | 60表 |
| 39 | 大工持道具之覚 | 大工持道具之覚 | 60裏 |
| 40 | 質屋之覚 | 質屋之事 | 60裏 |
| 41 | 山之名之覚 | 山之名 | 60裏 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 42 | 神仏人之名付 | 神仏并人之名之覚 | 63表 |
| 43 | 七福神之名付 | 七福神之名付 | 65表 |
| 44 | 七艸之名付 | 七艸之名付 | 65裏 |
| 45 | 近江八景 | 近江八景之覚 | 66表 |
| 46 | 六玉川之名付 | 六玉川之覚 | 66裏 |
| 47 | 飲喰物之名付 | 飲喰物之覚 | 66裏 |
| 48 | | 魚之名之覚 | 68裏 |
| 49 | 鳥虫之名付 | 鳥虫之名 | 69裏 |
| 50 | 獣之名付之覚 | 獣之名 | 72表 |
| 51 | 艸之名付之覚 | 艸の名之覚 | 73表 |
| 52 | 木之名付之覚 | 木の名之覚 | 76表 |
| 53 | 器財之名付之覚 | 器財之名付 | 77表 |
| 54 | 衣類之名付覚 | 衣類之覚 | 86表 |
| 55 | 支体并病体之付覚 | 支体并病体之覚 | 87裏 |
| 56 | 天地之文字之覚 | 天地之文字 | 89表 |
| 57 | 雑用平生遣文字并人倫之名之覚 | 平生遣文字并人倫之名 | 90裏 |
| 58 | 平生遣雑用文字いろは寄 | 雑用平生遣ふ文字いろはよせ | 95表 |

尾崎（おさき）柳沢（やなぎさわ）秋田（あきた）松前（まつまい）箱館（はこだて）蝦夷嶋（えぞかしま）津軽（つがる）青森（あをもり）」という具合であり、琉球から蝦夷までを掲出するものの、東北以外の地域は全くの摘記といえる。次の32「所道中記」も、その「所」が意味するのは書名の「所童」の「所」と同じで、「鬼柳（おにやなぎ）〈仙台領の御境也〉御番所（ごばんしよ）和賀川（わかかは）〈舟渡（ふなわたし）〉黒沢尻町（くろしさわすりまち）」と奥羽街道の藩領南端から始まり「花巻（はなまき）」「見前町（みるまへまち）」「津志田（つした）」「物留御番所（ものとめごばんしよ）〈船橋右の方に有〉」等、盛岡城下に至る街道沿い及び城下内の地名や寺社、名所、商家を掲出するものである。これに続く33～36は分類名が示すとおり盛岡城下に関わる内容である。日本全国の中での盛岡藩領をごく大づかみに位置づける面もわずかに備わっているものの、基本的には見前村を中心とする藩領内の地域情報を詳細に記すという方針を採っていることになる。41「山之名」の見出語も冒頭の「巌鷲山（がんしゅざん）」（＝岩手山）から続く「城山（しろやま）南昌山（なんしやうさん）姫ケ嶽（ひめかだけ）駒ケ嶽（こまかだけ）早地嶺山（はやちねざん）仙人峠（せんにんとうけ）踏鞴山（たたらさん）鶏頭山（けいとうさん）」が盛岡藩領、その後が「月山（つくさん）羽黒山（はくろさん）湯殿山（ゆとのさん）」の出羽三山で、この後にようやく「富士山（ふじさん）蓬莱山（ほうらいさん）高野山（かうやさん）」が掲出されるが、直後に盛岡藩領の「宇曽利山（うそりさん）」（＝恐山）が置かれてこの部が終わるのであった。

地理型往来において特定の地域や街道を取り上げる

ことは、仙台より江戸までの街道の地名を対象にした『道中往来』や、奥州平泉の名所旧跡とその来歴を対象にした『平泉往来』（いずれも仙台伊勢屋版）等、版本であっても珍しいことではなく、地域の手習用に寺子屋の師匠が編纂したものではあれば当然ありうる姿と見ることもできよう。『所童早合点』が収録する地誌情報はまさにその書名に合致するものなのである。ただし、本書の個性はこれだけではない。

次に引用するのは、58「雑用平生遣ふ文字いろはよせ」の「や」から始まる見出語と割注の全体である。

休〈畑抔打て〉藪入〈正月十六日へ先仏壇を開く藪入 里夕〉宿替　家普請〈世に宿処といふ〉家移〈移徙共へ移徙のかならず覗く両隣り〉約束〈約諾ともいふ〉痩肥　野菜〈仏事の〉養生　養父　養子　様子　幼少〈わらしの〉家内喜多留〈婚礼の節遣ふ酒樽也へ仲人の世話にてかりる家内喜多留 里夕〉用水　用捨　用心厳敷

＊「様子」の「子」の左に「す」の傍訓有

先に書誌の項でも言及したが、右の「藪入」「家移」「家内喜多留」に見えるように、本書の割注には折々に発句や七七の句が引用されることがある。作者が示される場合は「里夕」がほとんどで、これが、本書を星川里夕の編著とする傍証の一つになっていた。ここに示した三例に見るとおり、いずれも見出語にちなむ生活の場面を切り取ったものであり、初学の手習いに資する面があったか否かは即断できないが、読み進める意欲をかき立てる面は確かにあるといえよう。また、「家内喜多留」にちなむところでは、110丁裏「婚礼」の割注に「へ婚礼にむかしの残る石礫 里夕 花巻方に今有」との記述があり、婚礼の行列に礫を投げる風習が花巻周辺に残っていたことが知られるなど、当時の風俗を活写した発句から得られる情報は現代においても少なくない。

次に注目されるのは、「家普請」の割注の「世に宿処といふ」、及び、「幼少」の割注の「わらし」である。前者の「やどこ」は、『日本国語大辞典 第二版』が、「家の普請」の意味で青森県三戸郡、秋田県鹿角郡に、「屋根のふき替え」の意味で岩手県各地に、それぞれ近代の文献に拠って方言としての使用が存することを記している。この語については、都南村誌編集委員会

（一九七四）も「やどこ・やどこ無尽」の項（九七六頁）で、「屋根の葺替や、新築のときのユイは特にヤドコと呼ばれている」と記しており、当地での使用も確認できる。「宿処」という漢字表記が与えられていることから、今後近隣の近世文書や日記を調査することで用例を確認することができるかもしれないが、本書の用例は一九世紀前半の語義の明らかな確例として貴重である。「わらし」も、『日本国語大辞典 第二版』が、「子ども」の意味で、東北地方を中心とする地域に分布が存する旨を記している。(注6)

また、「痩肥」や「様子」のような訛形を示す表記が存することも付け加えておく。実は類例は先に引用したニの本文中にも「居処を乱し」や「あぐに交はり」（灰汁と悪を掛ける）、「心ゆるしなよ」のように見えていた。ただし、本稿で参照している里夕の著作は全て近代の転写本で、その親本も里夕自筆のものか、数次の転写を経たものかが不明のため、一文字の仮名の交替や濁点の付加によって知られる訛形の場合は、里夕の意識や意図に由来するのか否かを判断することが難しい。近代の転写時に敢えて訛形に改変したとは考えがたいものの、ここではこのような例の存在のみを述べ、全体的な傾向の分析には立ち入らないこととする。

訛形の存否については判断を保留せざるを得ないものの、『所童早合点』の収録内容の地域性は、地誌関係の語の収録状況からだけではなく、その他の語彙や語形からも看取されることになる。ここではさらに「宿処」のように「世に」として記される割注に着目してみる。次頁の表二は「宿処」以外の全四一例を一覧にしたものである。(注7)表中、■を以て替えているのは、先の場合と同様に稿者の理解不足から、適当な判読ができない箇所である。(注8)

表二に示した中には、6「強飯」に対する「こはい」、17「蕪」に対する「かふ」、41「叫」に対する「さかふ」のように、見出語か割注の語形が編纂時とは異なっている可能性がある例が見える。6は「わ」と「は」という仮名遣上の相違が見えるが、この交替は殊更に注すべき語形上の相違とは考え難く、17も二音節目が清音の「かふ」という語形は想定しがたい。41に至っては、割注で示そうとした語形は「さかぶ」乃至は「さがぶ」と予想されるが、見出語にも同じ「さかふ」が記されており割注が意味を失っている。これらは編纂時の見

| | 見出語 | 見出語付訓 | 割注　＊付訓は後の（ ）内に示す | 位置 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 鼠麹艸 | ごきやう | 世に母子草（はゝこくさ）といふ | 65裏 |
| 2 | 繁蘰 | はこべら | 世にはこべといふ | 65裏 |
| 3 | 仏座 | ほとけのざ | 世に田平子（たへいらご）といふ | 65裏 |
| 4 | 菘 | すゝな | 世に水菜（みつな）といふ | 65裏 |
| 5 | 蘿蔔 | すゝしろ | 世に大根（たいこん）といふ | 66表 |
| 6 | 強飯 | こわい | 世にこはいといふ | 67表 |
| 7 | 目高 | めたか | 世に目ざつこといふなり | 69表 |
| 8 | 水鶏 | くいな | 世に鉦打といふ | 70表 |
| 9 | 蝶 | てう | 世にかつかべといふ　花巻にて■ひらこといふ | 71表 |
| 10 | 蜻蛉 | とんはう | 世にあけつといふなり | 71裏 |
| 11 | 蜘 | くも | 世にくぼといふ | 71裏 |
| 12 | 蟊 | いなご | 世にいなはつだきといふ | 71裏 |
| 13 | 蟇 | ひつき | 世にびつきといふなり | 71裏 |
| 14 | 土龍 | うくらもち | 世にもくらもちといふ | 71裏 |
| 15 | 蚯蚓 | みゝず | 世にめゝずといふなり | 71裏 |
| 16 | 番椒 | とうからし | 世になんばんといふ　慶長十年朝鮮ゟ日本へ渡 | 73裏 |
| 17 | 蕪 | かぶ | 世にかふといふ | 74表 |
| 18 | 萱艸 | くはんさう | 世にかつこうくさといふ也 | 75表 |
| 19 | 法螺 | ほらかい | 世にほらのかひといふ | 79裏 |
| 20 | 羽子板 | はこいた | 世にはこき■といふ | 80表 |
| 21 | 鳶觜 | とひはし | 世にとひの口といふ | 84表 |
| 22 | 腰巻 | こしまき | 世にゆまきといふ | 86裏 |
| 23 | 染布 | そめぬの | 世にのゝといふ也 | 86裏 |
| 24 | 趨跛 | ちんは | 世にびつこといふ | 88表 |
| 25 | 鼾 | いひき | 世に鼻音といふ | 88裏 |
| 26 | 嚔 | くさめ | 世にさふきといふ也 | 88裏 |
| 27 | 霍乱 | くはくらん | 世にはくらんといふなり | 89表 |
| 28 | 聾 | つんほ | 世にきかずといふ | 89表 |
| 29 | 皸 | あかきれ | 世にひひきれるといふ | 89表 |
| 30 | 梓弓 | あつさゆみ | 世に口よせといふ事也 | 90裏 |
| 31 | 花聟 | はなむこ | 世に花もこといふ也 | 96表 |
| 32 | 破風 | はふ | 家の　世にかほといふ | 96裏 |
| 33 | 膠 | にかは | 物をつける　世ににかといふ | 97裏 |
| 34 | 可笑 | おかし | 世におかしいといふ | 100表 |
| 35 | 蚊遣火 | かやりひ | 世に蚊ゆぶすといふ〱蚊遣火二階の人は雲のうへ　里タ | 100裏 |
| 36 | 産宮詣 | うふすなもふて | 世におほすなという | 106裏 |
| 37 | 霍乱 | くわくらん | 世にはくらんといふ | 107表 |
| 38 | 家普請 | いゑふしん | 世に宿処（やとこ）といふ | 107裏 |
| 39 | 剱舞 | けんふ | 世にけんはいといふ | 109表 |
| 40 | 畚 | はきご | 世にはけごといふ也 | 109裏 |
| 41 | 叫 | さかふ | 世にさかふといふ | 113裏 |

表二

出語では「強飯（こはいひ）」「蕪（かぶら）」「叫（さけぶ）」とでもあったものが、転写の段階で改変されたものと推測される。13「蟇（ひつき）」に対する「びつき」も、語頭の「ひ」の清濁の問題なのではなく、見出語の本来の語形は「蟇（ひきかへる）」などの標準的なもので、それを方言語形「びつき」と対照させたものだったであろうか。以上のようなテキスト上の問題があることを念頭において、表中のいくつかの項目に対して若干の補足を行うことにする。

まず、7から15にかけての生物名をみると、「目ざつこ」（＝メダカ）、「鉦内」（＝クイナ）、「かつかべ」（＝蝶）、「あけつ」（＝トンボ）、「くぼ」（＝蜘蛛）、「いなはつだき」（＝イナゴ）は、当地らしい語形といえる。一方、1から5までは七草が列挙されている部分であるが、「鼠麹艸（ごきやう）」に対する「母子草（はこくさ）」、「蘿蔔（すしろ）」に対する「大根（たいこん）」等は特段の地域性を見出すことが難しく、何らかの書物から一般的な語釈を転載したものとみるべきであろう。14「もくらもち（注）」（＝モグラ）や15「めめず」（＝ミミズ）も必ずしも東北に限った語形ではなく、方言の反映か書物からの転載かは、編纂資料の特定を待ってからでないと判定が難しい。このように、個々の語の性格は一定ではなく、各々について割注に示された背景を検討していかねばならないが、25「鼻音」（＝いびき）、32「かほ」（＝破風）、33「にか」（＝膠）、40「はきご」「はけご」、41「さかふ」（＝叫ぶ）などは、当地の方言語形と一致するだけでなく、文献上の早い用例である点で貴重なものといって良い。

右に見るように、割注で「世に」として別語形を掲出するに際しては、地域の方言を提示する場合と、地域によらない一般的な語形を提示する場合との大きく二つがあった。ただし、この二つは連続的でもある。編纂者の里夕が全国の方言を知悉していたとは考えられない以上、方言語形を一般的な語形と認識していたり、逆に一般的な語形を方言語形と認識している場合もあったであろう。実際に注を記す際には、そのいずれとも意識することなく、単にわかりやすい語形を選択したという場合も多いかもしれない。しかし、狂歌や俳諧を嗜み、道行文や狂文をものし、言語的な地域性を感じさせない洒落本をも執筆していたかもしれない里夕であってみれば、ビッキやサガブが出版書の中に見えない語であるという程度のことは認識していたであろうし、自身の編む字尽からそれらを注意深く排除するという方針を採ることも可能であったはずであ

る。里夕がそのような方針を採らなかったのは、一九世紀前半の盛岡藩領見前村が、初学者向けの字尽に用いる注釈のことばに方言を交え用いる試みを許容するような状況にあったからであろう。本書の構成と所収内容からは、当地の地誌上、言語上の具体的な様相に加えて、方言を書くことに対する許容度をも窺うことができるのである。

## 四　まとめ

高橋（二〇一六）は、「室町時代に流行した辞書の一類に、小型の意味分類体辞書、和名集がある」とし、確認できる一八本のうち六本は、巻末付載や合本の形で「いろは分類体の辞書を併せ持」つこと、また、「いろは分類体辞書、色葉字を主とする辞書も種々編纂され」、同じく確認できる一一本のうち八本が「意味分類体の辞書を併せ持」つことを指摘した（八〇〇頁～八〇一頁）。また、こうした博物語彙の収録を中心とする意義分類体辞書が「末尾に特殊な部を立てて観念語彙を補う」ような形態は、「識字層の子弟のための初学者用辞書」として「日本・琉球・中国・越南において類似性を示す」（八五〇頁）とも述べている。イロハ分類体とその他の分類体の語彙集を合書する形態は、近世以降の版本にも受け継がれており、万治二年1659刊『童訓集』、正徳六年1716刊『四民童子字尽安見』、寛政一一年1799刊『文章字尽節用解』等が知られている。[注10] 漢字で表記される語を中心とするものに限らなければ、和歌や俳諧の用語辞書にも多く見られ、方言に言及する語彙集として知られる安永八年1779刊『雅言俗語 俳諧翌檜』もこの形態を採っている。[注11] 表一にその構成を示したとおり、『所童早合点』もその驥尾に付く辞書ということになろうか。高橋氏はまた、イロハ意義分類体の古本節用集諸本と比較してこの形態の中世辞書に文書用語の収録や異体字の掲出が多いことを示してその実用辞書としての性格を裏付ける例証としており、米谷（二〇一三）はやはり後者に方言の反映が目立つ旨の報告をしている。このような点を勘案して改めて『所童早合点』の特徴を見ると、初学者向けの実用的な辞書には、時代を超えた共通性があることを思い知らされる。

方言語形の収録ということについてさらに言えば、近世の盛岡藩領における方言集として知られる寛政二年の『御国通辞』や、少し遅れた時期に編纂が進めら

れていた『谷の下水』とは、その目的を異にするという点も重要である。[注12]『御国通辞』や『谷の下水』は、方言を対象化して取り上げるまさに方言集として方言語形を掲出するのに対し、『所童早合点』は初学者の学習に資するために方言語形を利用しているのであった。もちろん全ての語や語形について里夕が方言か否かを峻別できたわけではあるまい。しかし、著作から知られる里夕の学識から推して、方言語形も必要に応じて紙上に記し実用に供す、という方針の選択までは自覚的であったと考えざるをえない。

近世後期の東北では、方言を敢えて反映させて日常に資する知識を伝える書物が数多く刊行されていた。[注13]御詠歌の類はその代表的なものであるが、口唱を旨としない農書や通俗医書、教訓書の類にも広がりをみせている。そのような書物が刊行され、受容されるにあたっては、里夕のような人物が各地に存在していたことがその背景にあったのではなかろうか。

**注**

（1）井上隆明他（一九七二）に解題と翻刻が備わる。井上氏による解題に「角館の城下地方の風俗、地方言語も併せて実態がしのばれる。…中略…シとスの結合、イ段とウ段の混合的中舌母音は、古い時代に全国にあったとすれば、写実資料として言語学からも評価できるであろう」とあるのは注目される。

（2）このうち、ハ・ニは国文学研究資料館の新日本古典籍総合データベース上でも閲覧することができる。

（3）宮崎父子については都南村誌編集委員会（一九七四）の一一一〇頁～一一一二頁を参照した。「宮崎教山」も父子のいずれかと思われるが未詳。また、高橋・家井（二〇一五）によると、宮崎文庫の典籍は、岩手師範学校（現岩手大学教育学部）へ移管されたものと、太田孝太郎氏を経て岩手県立図書館へ移管されたもの、行方不明のもの、との三群がある。このうち、岩手大学所蔵分については、高橋（二〇一五）によって、また、私立図書館時代の宮崎文庫の書目も高橋・家井（二〇一六）及び高橋（二〇一六）で大要を窺うことができるが、イ・ハ・及び『所童早合点』の書名は見えない。

（4）ニを転写した成田良次氏については未詳であるが、もりおか歴史文化館所蔵の盛岡中央公民館旧蔵典籍の中には他にも同氏による転写本が存することから、太田氏と同様に地域史に造詣が深い人物であったと思われる。

（5）数値を記す部のうち比較的わかりやすいのは29「見前 高之覚」の「三本柳 西見前 東見前 高田 藤澤 北矢幅 下矢

幅上矢幅又兵衛新田 矢幅合拾ヶ村（五千九百五拾石八斗五升三合）」である。『南部叢書 五』所収の『邦内郷村志』では安永九年の「志和郡見前県」の「三本柳村」「西見前村」「東見前村」「高田村」「藤澤村」「下矢次村」「北矢羽場村」「上矢次村」「南矢羽場村」以上九村の総計は「高五千五百三十五石八斗余」、都南歴史民俗資料館蔵の嘉永三年の『御領分郷尽』では「見前通／一高五千五百九拾五石六斗三升三合／西見前村 東見前／三本柳村 高田村／藤沢村 上矢継村／下矢継村 南矢幅村／又兵衛新田村 〆九ヶ村」であり、いずれも『所童早合点』の十ヶ村よりも一ヶ村少ないため石数が若干少ないものの、ごく近い数値になっている。その他の数値の根拠については今後の確認に俟つところが多い。

（6）文献上の用例としては、人情本の『春色梅美婦禰』と近代の深田久彌の『津軽の野づら』を掲載する。前者の用例も、奥州出身女性の手紙文に見えるものであるため、地域上の問題はない。ただし、本文では「わらじ」（国会図書館デジタルコレクションの掲出画像による）。

（7）この他に、「世に」としてではないが、84丁裏「編笠」の割注の「奥通（＝盛岡以北）にてははおりといふ」、93丁表「女郎」の割注の「江戸吉原にては女郎といふ 上方にてはふんはりといふ 津志田にては女郎 盛岡にてはしべた 宮古にてはおしやらく 田名部にては〆たはこ 佐井にてはたご 松前箱館にては厂の字…中略…大野にては皮足袋当別にてかじかといふ…以下略」のように、藩領内や蝦夷地について地域をより限定して名称を記す箇所もある。

（8）以降、岩手方言に関する認定は『日本国語大辞典 第二版』と小松代（一九五九）（一九六一）（一九六二）に収録の記載に拠った。なお、71丁表の「蝶」は「花卷にてかひらこ」乃至は「花卷にてはひらこ」と思われる。前者であれば蝶の古名の「かわひらこ」系の語と見るべきかもしれないがやや不審が残る。岩手県にみえるのは「てびらこ」。また、80丁表の「羽子板」は「はこきこ」乃至は「はこきた」と思われる。後者であれば室町期までの古名「こきいた」との関係も考慮にいれるべきか。誤写の可能性も捨てきれない。

（9）モグラの名称については前田（一九六九）を参照した。

（10）字尽型の往来物に関するこうした流れは石川（一九七〇）、山田（一九八一）に言及されている。

（11）表一に示した43から46は『雅言俗語 俳諧翌檜』と共通する内容であるが、それ以外の部分では顕著な一致をみることができない。43から46の内容は諸書に見えることから、今のところは『雅言俗語 俳諧翌檜』を編纂資料とする確証はない。

（12）『御国通辞』『谷の下水』については、小松代（一九六二）を参照した。また、『御国通辞』は国語学大系所収本文にて、『谷の下水』は岩手県立図書館蔵本にて確認を行っている。なお、『所童早合点』はこうした方言集と作田（二〇一八）が分析に用いる「庶民記録」との間に置かれる文献であろうが、総合的な検討は別の機会に行うこととする。

（13）東北の近世版本に見える方言の反映事例については米谷（二〇一四）（二〇一九）で示した。

【参考文献】

石川松太郎（一九七〇）『日本教科書大系 往来編 別巻 往来物系譜』（講談社）
一ノ倉則文（一九八四）『用語南部盛岡藩辞典』（東洋書院）
乾善彦（二〇〇〇）『世話早学問 影印と翻刻』（和泉書院）
井上隆明他（一九七二）『新秋田叢書 第十五巻』（歴史図書社）
岩手県教育委員会（一九八一）『岩手近代教育史 第一巻 明治編』（岩手県教育委員会）。特に「第三節 寺子屋の教育」二―二）
太田孝太郎（一九五一）「藩政時代往来物解題」（『奥羽史談』）
柏原司郎（二〇一五）『近世の国語辞書 節用集の付録 増補改訂版』（おうふう）
木村晟（一九九五）『古辞書研究資料叢刊第一〇巻 雅言俗語俳諧翌檜』（大空社）
小林隆（二〇〇四）『方言学的日本語史の研究』（ひつじ書房）
小松代融一（一九五九）『岩手方言の語彙』（岩手方言研究会）
小松代融一（一九六一）『岩手方言研究史考』（岩手方言研究会）
小松代融一（一九六二）「御国通辞と谷の下水―岩手方言研究資料の解説―」（『国語学』四八、国語学会）
作田将三郎（二〇一八）「地方語文献にみる方言語彙」（『シリーズ〈日本語の語彙〉8方言の語彙』、朝倉書店）
高橋和孝（二〇一五）「宮崎文庫リスト」（https://www.lib.iwate-u.ac.jp/img/miyazakibunko_list.pdf　二〇二〇年九月二〇日最終確認）
高橋和孝・家井美千子（二〇一五）「岩手大学図書館所蔵の「宮崎文庫」を中心とした古典籍のアーカイブ化に向けて」（『アルテスリベラレス』九六）
高橋和孝・家井美千子（二〇一六）「『私立図書館宮崎文庫仮図書目録』の翻刻（一）」『アルテスリベラレス』九八）
高橋和孝（二〇一六）「『私立図書館宮崎文庫仮図書目録』の翻刻（二）」『アルテスリベラレス』九九）
高橋忠彦・高橋久子（二〇一六）『いろは分類体辞書の総合的研究』（武蔵野書院）
都南村誌編集委員会（一九七四）『都南村誌』（都南村）
前田富祺（一九六九）（一九七〇）「モグラの語史（上）・（中）」（『日本文学ノート』四・五、宮城学院女子大学日本文学会）
山田忠雄（一九八一）『近代国語辞書の歩み―その模倣と創意と―上』（三省堂）
山本淳（二〇一四）「方言資料としての『かてもの』と『飯粮集』」（『山形県立米沢女子短期大学紀要』五〇）
米谷隆史（二〇一三）「シモの古辞書に見える 方言の反映をめぐって」（『日本語学会二〇 一三年秋季大会発表予稿集』、日本語学会）
米谷隆史（二〇一四）「往来物に見る方言反映事例について―近世後期の東北地方における―」（『熊本県立大学文学部紀要』二〇）
米谷隆史（二〇一九）「産育書の言葉東西」（『文彩』一五、熊本県立大学文学部）

＊本稿はＪＳＰＳ科研費（26580084）「東北の近世版本にみられる方言反映事例の発掘と評価」、（17K02782）「近世東北の写本辞書に見える地域性の諸相に関する研究」の成果の一部です。
＊本稿をなすにあたっては、岩手県立図書館、都南歴史民俗資料館、もりおか歴史文化館の皆様より、閲覧調査と撮影の御許可のみならず、多くの有益な情報を頂戴いたしました。ここに記して御礼を申し上げます。